第１回学識者等による若手の会・NB ミーティング合同勉強会

（１）実施概要

日　　時：平成 24 年 11 月 29 日（木）　16：50～18：20

会　　場：大阪東急イン　ホテル内 2 階会議室

出 席 者：講師：池田 孝之氏（琉球大学名誉教授）

≪普天間飛行場の跡地を考える若手の会≫

大川　正彦（会長）、呉屋　力（副会長）、伊佐　力、呉屋　栄治、富川　盛光、大門　達也、宮城　敏彦、宮城　武、我如古　隆、比嘉　立広

≪ねたてのまちベースミーティング≫

新里　均、前田　啓文、松川　寛重、安仁屋　眞昭

≪宜野湾市軍用地等地主会≫

佐喜眞　祐輝、伊佐　貴子

≪事務局（宜野湾市基地政策部基地跡地対策課）≫

仲村　等、渡嘉敷　真

≪事務局（昭和株式会社）≫

板倉　慎、立山　善宏、崎山　嗣朗、嶋岡　強太、平井　茉美

テ ー マ：「海外のサイエンスパーク（ソフィア・アンティポリス）を事例に」

配 布 資 料：次第

講師プロフィール

総括表　海外の主要リサーチパークの概要

写真：講師 池田孝之氏（琉球大学名誉教授）

写真：合同勉強会の様子（第１回）

（２）講義内容

第１回若手の会・NB ミーティング合同勉強会では、池田孝之先生（琉球大学名誉教授）を講師に迎え、「海外のサイエンスパーク（ソフィア・アンティポリス）を事例に」をテーマに講演頂き、その後、質疑応答を行った。

主に普天間飛行場の跡地利用としては、大規模公園が目玉となることから、それについてヒントになるもの、また今回の視察を踏まえて、フランスのソフィア・アンティポリスの事例をご紹介頂きながら、普天間の公園をどうしたら良いのかについて議論を深めた。

池 田 先 生

普天間飛行場の跡地利用としては、大規模公園が目玉となる。それについてヒントになるもの、また今回の視察もその中での企業誘致を含めた考え方を学ぼうということであるため、それと絡めて世界の動向であったり、今、私が一番気にしているフランスのソフィア・アンティポリスの事例をご紹介しながら、普天間の公園をどうしたら良いのかを皆さんと一緒に考えられたらなと思う。よろしくお願いしたい。資料については、私が書いたものではないが、ソフィア・アンティポリスには２度ほど訪問したことがあるので、現地で説明を聞いたり、実際に見た感想を付け加えて皆さんにご紹介したい。最初のページに総括表がある。これは「リサーチパーク」をテーマとしてまとめられている。色々な研究機関、企業が研究施設を作るようなテクノパーク、リサーチパークが今世界でかなり進んでいる。その中にソフィア・アンティポリスがある。世界の状況を簡単に説明すると、フォード・リサーチパークは大変有名で、もともとシリコンバレーと呼ばれたコンピュータのチップの開発をやってきたところになる。フォード・リサーチパークはそのチップの開発を行う研究所や大学の施設がある谷間（バレー）となっている。谷間といってもサンフランシスコのベイエリアといわれる所の川沿いに面した水が豊富な場所。シリコンはかなり水を使うので、水に恵まれている場所であるだけでなく、非常に場所が良く、スタンフォード大学を中心に色んな研究機関が入っている。この場所でシリコンのチップの開発を進めたことが世界中のパソコンの発展に寄与したということで有名な所になる。ここはかなり早い時期から整備が進められたリサーチパーク。それ以外にもリサーチ・トライアングル・パークやユタ州のリサーチパーク、イギリスのケンブリッジのサイエンスパークなどがある。イギリスも有名ですが、アメリカほどは盛んではない状況にある。その他、ドイツのメディカルパーク・ハノーバー、ベルギーのルーバン・ラ・ヌーブ、中国の北京や台湾にも存在しており、世界各国で進められている。フランスのソフィア・アンティポリスの規模は 2,300ha であり、普天間の約 4.5 倍と規模は非常に大きなものとなっている。パリから離れた場所にあり、南フランスの地中海沿岸部にあり、サイエンスを中心としたまちを作っている、非常に大きく有名な所。同時に、場所が非常に良いので、リゾート地のメッカとしても有名な場所となっている。このまちを作るにあたって特徴としては、ニースの商工会議所が入って

いることが挙げられる。日本の場合、商工会議所は商業・工業関係の会社の親睦団体のような団体で、直接何か事業をすることはないが、フランスやアメリカでは直接事業をやっている。直接お金を集めたり、収益を求めた活動を行ったりしている。そういったことからこの開発にはニースの商工会議所が加わって行っている特殊な仕組みとなっている。また、大きな特徴としては国家プロジェクトであるということが言える。フランスは地方分権を世界で一番早くに行った国であり、国家が非常に強く、国家プロジェクトをあちこちで展開しているが、次々と地方に権限移譲している。その後は地方の県に相当するところが受け継いでやっている。どのような企業が入っているかということについては、エレクトロニクス、医療・バイオ、エネルギーなどの技術系のものが中心になっており、すでに 950 社が入り 16,000 人の雇用が生まれている。環境を重視した明快な新都市開発のコンセプトのもとにやってきたということで、ニースの商工会議所や大学の学長や政治家等色々な人の貢献があった。資料の 2 ページにソフィア・アンティポリス全景の写真がある。上の方に地中海があり、少し入った所にソフィア・アンティポリスはある。今日見た国際文化公園都市は大阪から非常に近かかったが、距離的にはソフィア・アンティポリスと地中海までの距離はそれぐらいとなっている。海から 30 分もしない、そういったロケーションに立地している。海から近いということで、ヨット等で遊ぶことができるなど、リゾートの感じが非常に強い場所となっている。3 ページに図があるが、下の方は海となっている。そこの海岸に面した色の塗ってある部分がソフィア・アンティポリスになる。地中海に面して、ニース、コート・ダジュールなどは昔から高級なリゾート地といわれている所の周辺に位置している。非常にロケーションの良いところにある。ソフィア・アンティポリスの名前の由来は、「ソフィア」はフランス語で知恵、「アンテ」は否定形で「ポリス」は都市、つまり都市ではない、知恵の集まっている通常の都市ではないという意味で名づけられている。ソフィア・アンティポリスはヨーロッパで最初のサイエンスパークとなっている。1974 年に設立されており、40 年くらい前にできている。68 の国籍の人達が働いており、4,000 人の研究者、14,000 人のエンジニア、48,000 人の学生がいる。概要だけを見ると研究学園都市のように見えるが、実はそうではない。色々な商業施設であったり、芸術作品にも囲まれた環境となっている。研究開発・知識産業のメンバーとしては、IBM が入ったことが一番大きな引き金となっているようです。IBM の研究所がある他、多国籍企業の研究所が入っていたり、中小のスタートアップ企業が入る場所もあり、公益な研究や教育機関が 50 機関も入っている。主要分野に関しては、今後普天間の公園を考える上でも重要なポイントになると思うが、ソフィア・アンティポリスでは情報技術、生命科学（医薬・バイオ）、環境科学となっている。ソフィア・アンティポリスでは 40 年前にすでに色々な企業が入ったまちづくりを行っている。今回の視察でも、国際文化公園都市ではたまたま製薬企業が根付いている土地柄であるということから、それを活かして誘致を行っているが、沖縄で

もそういった土壌はあると思う。6 ページでは「競争と協調：ネットワーキング」ということで、色々な企業が競争したり、協調しながら企業活動を行っているということが書かれている。色々な集団が発表会をしたり、色々なプランを出したりといった交流があり、それを起こすための組織も存在している。7 ページには写真を載せている。非常に緑が多く、デザインに優れた色々な建物が立地している。そのほとんどは研究所のようなものとなっている。8 ページでは概要がまとめられている。ソフィア・アンティポリスの事業主体は、国土開発庁が SYMIVAL という特殊法人を立ち上げてやっている。国家プロジェクトでやる場合、特殊法人を国が進めるという方法をとっている。今は、県が 51%、商工会議所が 49%と半々の出資でやっている。付け加える点としては、まず、色々な企業が参入している点。なぜ企業がここにくるのかというと、今回の所もそうだが、インフラ整備がしっかりしていることがある。インフラ整備は IT ネットワークもそうだが、水や電気などもある。交通機関ネットワークも非常に重要なポイントとなる。ソフィア・アンティポリスは空港が近く、飛行機もパリ等へ多く飛んでいるので、立地の良さがある。また、企業で働く人達の環境が非常に良いことも要因の一つとなっている。ここには共同で使えるプールやスパ、ジム等の施設が整っており、ここでリフレッシュできるということが非常に大きな魅力となっている。それに加え、海に出て行ってヨットに乗ることもでき、パリでは絶対にできないことがここではできるため、フランス国内から色々な企業が来ている。そして、パリに近いということもあるが、国際的に飛行機のアクセスも非常に良いので、色々な企業が進出している。そして、もう一つ、リゾートに関連するが、ここの中で文化を作り出したいという理念がもともとあり、文化を生み出す方法として芸術を生み出そうとしていることが挙げられる。ここに進出している色々な研究所の人達は美術館を運営し、クリエイティブな仕事をしながら同時に絵を描いたり、音楽やったり、彫刻をやったりしている。そういった作品を美術館で展示して、美術館が成り立っている。これも非常に有名で、それが就業者の励みになっているようだ。同時に大きな作品はこの都市の色々な所に置かれている。それが都市全体の雰囲気を作り出しており、とてもユニーク。もう一つ付け加えると、ソフィア・アンティポリスのまちのすぐ近くに非常に古い歴史的なまちがある。その歴史的なまちは、もともとあまり有名ではなかったが、古い陶器の名産地だった。ソフィア・アンティポリスができ人が多く来たことによって、古いまちの集落や陶器はかなり脚光浴び、そのまちもリゾートのコースになるなどの効果も生まれている。ソフィア・アンティポリスは海があって、そばに歴史があって、緑があって、そういうものを享受しながら芸術的な雰囲気の中で働くことができる環境がそろっているまちになっている。企業だけが集まっているのではなく、プラスアルファの要素が非常に大きく影響している。そういったことがなぜできるのかというと、ここの地域の土壌として、リゾート的な要素があるため、成り立っている。研究者等にとっては、そういった環境が大変重要になっている。また、

環境の良さによって多くの人を惹きつけている。また、住宅に関していえば、宿舎などはあるが、いわゆる住宅団地のようなものはほとんどない。テクノパークはほとんどがそうなっている。ここでは企業等で働いている人達の住宅はあるが、それ以外の一般の住宅はほとんどない。今日視察で見た国際文化公園都市は、正確には住宅団地ですね。住宅団地と企業誘致の場所が隣り合わせでやっているので、テクノパークとは少し違う感じがする。以上のようなことをヒントにしながら、普天間の公園をどう考えるのかについて私なりの考えを提案させて頂いて、皆さんと議論していきたいと思う。普天間の公園として、国営公園について考えたいと思う。なぜ国営公園を考えるのかというと、土地区画整理事業によって整備された今日の視察地では減歩率が 50～60%、新都市や那覇でも 35～40%とすごい高い減歩率になっている。この高い減歩率が地主の方の中でも問題になっている。確かに、丘陵地では使えない部分も多いので減歩率は高くなる傾向はあるが、それは利用の仕方であって、いずれにしても減歩率が高いなと感じる。区画整理の仕組みは皆さんが少しずつ土地を出して、その土地（減歩）で道路や公園等の公共用地を生み出そうとするもの。では、公園をつくろうとすると、土地の多くが減歩でもっていかれてしまうのか。それでは道路や公園は少ない方が良いのか。少ない方が良いとなると、都市の共有部分がほとんどなくなってしまって、バラバラなものができ都市の魅力がなくなってしまう。減歩率の高さと公共用地の少なさのせめぎ合いになってしまう。そういったことから、減歩によらずに公共用地を生み出せば区画整理の減歩は気にしなくていいのではないか、逆に減歩は下がるのではないか、それが大規模公園の発想になっている。国営かどうかは別にして、大規模公園や幹線道路の整備は特別な事業として、用地買収で行うことができる。そうすると、区画整理の減歩率からは外れることになる。生活に必要な道路や公園等のみを減歩によって生み出すようにすれば、減歩率はある程度抑えることが可能になる。次に、都市の魅力を何で作るのかについて考えたいと思う。ソフィア・アンティポリスでは有名な企業が進出したことでその企業のネームバリューで魅力を作ろうとしているが、本来はあまり良い方法ではないと思う。ショッピングセンターにしても有名で流行っているものを呼んでも、いずれ人が来なくなってしまう可能性があり、魅力としては不安定である。安定的にその地域の魅力を生み出すためには、公共事業でまず一番の魅力を生み出すことが一つの方法として大事だと思う。民間が来るのはもう少し後でも良いと思う。公共事業が全てだとは思わないが、公共事業で大きなプロジェクトとしてその都市の魅力を作る。それが公園でできるのではないかと思う。普天間の跡地利用を考えた際の大きな魅力としては、大規模公園と新たな交通機関としての鉄軌道がある。国際文化公園都市は、大阪からわずか 30 分の距離で、その立地の良さがあそこの価値を高めているといえる。住宅団地をなぜあれだけ整備するのかというと、大阪等の大都市と近いからである。30 分程度で行けて、土地が安く、マンションが安い。さらに高速道路までのアクセスも良いので、企業としても立

地がしやすいというロケーションの良さがある。普天間を考えた場合、鉄軌道が通ることによって空港や那覇とのアクセス性が向上することが挙げられる。中南部都市圏の中で那覇のベッドタウンではないかと思われてしまうことも考えられるが、実は中南部都市圏の中心として普天間が成り立つようなことを考えている。では中南部都市圏の中心となるような那覇にはない機能は何なのか。それが今回提案しているようなテクノパークのようなものになる。公共事業で都市の魅力を高めるのに公園が一つの大きな手段になると思う。それが国家プロジェクトとなれば国営公園として安定的に管理することができると思う。次の議論として、その公園はただの公園で良いのか。通常の自然や緑があふれる公園だけで 100～150ha 整備しても、市民が憩うことはできるが、それが産業を生み出すわけでも、企業が立地するわけでもないので、都市の魅力を向上させるためには通常の公園だけではだめだと思う。公園の中で何が立地できるのかということを大いに考えていかなければならないと思う。その時に色々な研究所等の立地が考えられる。どのようなテーマで行うかは今後検討しなければならないが、今の流れを考慮すると医療・健康・環境を考えていくことが非常に重要だと思う。そういったものこそ、公園の中で成り立つとも思う。研究者や企業の従業員が働く環境としてもそういったものが必要であり、それにリゾート的な要素が加わればもっと良いのではないかと思う。ユニークな公園を作り、公園の中でも施設を立地させることは可能なので、研究所が立地できるような特例を作っても良いと思う。これまで普天間で検討してきた公園は、パンフレットにあるように、昔からあった緑と水系である地下水脈を活かし、普天間の歴史、自然環境をネットワークとしてつないだものになる。まとまった一つの公園ではないので作りにくいように思えるが、この案がしっかり公園として作られれば世界にもない非常にユニークな公園になると思う。逆にこのような形だからこそ、公園の中に研究所があったり、公園と公園の挟まれた部分に企業が立地したり、色々なものを組合せることができ、全体として公園都市のような雰囲気が作れると良いと思う。企業が立地し、人々が集まり、魅力が向上すると、そばの商業地や事業用の魅力も出てきて、用地の需要が高まる。つまり、公園に隣接する周辺の土地利用に効果が及ぶことになるので、それが大規模公園を整備する狙いになる。公園そのものだけでなく、公園に立地するものを含めて普通の公園にはない魅力を出すことで、様々なものを誘引し、なおかつ周辺の土地の利用価値を高めることができる。周辺の土地利用に関しては今後考えていかなければならないが、一つの考えとしては研究施設や企業を公園の中だけでなく、隣接した場所にも成り立つようにすれば良いのではないかと思う。そういったことのヒントとしてソフィア・アンティポリスや今回の視察で見る所が使えるのではないかと思う。今、医療や健康は非常に重要な要素となっている。また、国際文化公園都市では国際という言葉がキーワードとなっていた。医薬品関係は外国の企業がやってきて、日本で開発を行うことは法律上難しいという話があったが、企業誘致といっても海外企業が立地する許認可は大変難

しいのではないかと思う。沖縄で医薬品を考えるのかは別としても、健康分野等で海外企業との協力関係等は考えられると思う。国際性とは、海外の企業が立地すること、こちらの企業が海外の企業と提携して海外に出せる製品を生み出すこと等をやっていくことが大事だと思う。例えば、健康医療関係では、人間ドック等を行うツアーが今流行ってきている。日本の医療技術はかなり優れているので、人間ドックや健康診断を行うために１週間～1 カ月程度滞在し、さらにリゾート的な要素も満喫して帰るというツアーも人気になっている。そういったことで国際性を押し出すこともできると思う。また、東日本大震災を受けて環境重視・防災重視も注目されている。地域や都市レベルでやっていければ大変重要な役割を持つと思う。今、国の事業として「環境モデル都市」というものがあります。沖縄では宮古島市が環境モデル都市として指定されている。そこで、バイオエタノールやメガソーラーや風車等を使い、総合的にエネルギーを生み出す実証実験が行われている。さらに総合的に企業が参加して、都市レベルで展開できるような「環境未来都市」というものが今提案されている。環境モデル都市は環境省が提唱しているが、環境未来都市は経済産業省が提唱しているものになる。最近の流れとしては、環境モデル都市から環境未来都市へ転換しようと、宮古島市でも手を挙げようとしており、南城市ではすでに国に申請を出している状況にある。普天間でも環境未来都市を目指していくべきではないかと思っている。防災、環境共生の観点から、自動車や自転車のシェアリング、太陽光発電等がすっかり根付いた都市が環境未来都市となっていくのではないかと思う。

（３）質疑応答・意見交換内容

質問・意見	ソフィア・アンティポリスでは、2,300ha のうち緑地が 1,500ha となっており、半分以上を占めている。その中に公園は含まれているのか。
回　　答	芸術的なものも含めて公園は含まれている。2,300ha というととても大きく感じるが、ここも丘陵地のような自然に恵まれた場所なので、全ての土地を開発しているのではなく、緑地を残しつつ一部を開発している。開発面積としては 2,300ha よりもずっと少ない。
質問・意見	台湾の新竹科学工業園区はちょうど、普天間飛行場と似たような面積だが、この中には公園もあるのか。
回　　答	公園はあるが、ここの場合は工業団地のようになっている。テクノパークはパークという言葉を使ってはいるが、いわゆる公園法の公園の中に企業等が立地しているのではなく、工業団地のような所にＩＴ関係の施設が建っているというイメージ。台湾の場合は、大学の研究機関が中心となってやっているため、大学の施設が多く建っており、緑地公園として大きく作っているようなものは少ない。研修所やジム等は多くあると聞いている。
質問・意見	減歩率の問題はあるが、ここに住みたいと思えるような魅力があれば面積は減ってしまっても土地の相場は上がってくるのではないか。
回　　答	これまでの跡地利用はほとんどが住宅とショッピングセンター（商業施設）のセットであった。沖縄県内の住宅需要はもう頭打ちになっており、人口推計を見ても今後大きな住宅需要は見込めない。那覇から近く、利便性等を考えると、それなりの動きはあると思うが、よほど大きな魅力がなければ住宅需要では供給過多で、一般的な住宅用地を普天間の跡地から生み出してもほとんど売れ残ってしまうと考えられる。商業の方も、現在では飽和状態にある。アウトレットモールやあしびなー、観光客を対象にしたショッピングセンター等でなければ、通常の商品を扱う商業施設ではもう成り立たないと考えられる。従来の住宅団地と商業施設がセットになった方法では共倒れになってしまう。そのため、現在中南部全体で、それぞれの市が機能分担をし、その土地の機能を活かしながら別の機能を高めようとしている。今ある機能以外のもの、他ではできないものを普天間ではやろうということで、公園が一つの大きな要素となる。通常の住宅では売れ残ってしまうが、非常に魅力的な公園がそばにあり、とても居心地が良く環境が良い場所となれば今の家を売ってでも普天間に住みたいと考える人はいると思う。
質問・意見	公共事業で魅力を引き出すという話があったが、具体的には国営公園の整備といったことになるのか。

回　　答	国営ではなく県営でも良いのではないかという議論もあるが、県営でどれだけインパクトのあるものが作れるのかということが懸念される。国営公園である海洋博記念公園や首里城公園ではそれぞれ年間 600 万人の観光客のうち、350 万人、200 万人が訪れる場所となっている。国に頼って魅力を出そうということではなく、基地の跡地利用ということで戦後の色々な歴史を踏まえ、普天間という大きな事業を国の責務を含めてやるべきではないかと思う。海洋博記念公園はもともと国営公園ではなく、後に首里城公園と合わせて沖縄記念公園という一つの公園になった。そこに普天間も合わせて沖縄記念公園とすると良いのではないかと考えている。全く別の新しい国営公園を作ろうとしているのではない。
質問・意見	海洋博記念公園と首里城公園は観光客を惹きつける魅力があると思うが、普天間飛行場の跡地は決してそういった場所ではないと思う。そこに国営公園を作るとなると、中核となるような何かがないと魅力がないと思う。
回　　答	海洋博記念公園や首里城公園では収益がそれなりに上がっているが、普天間公園に対しては、まず収益性を求めるのかを検討しなければならない（首里城公園ではもともと収益性を考えていたわけではない)。ある程度の収益は、企業の研究施設等を公園内に立地できれば企業から借地料を取ることによって得られると考えている。
質問・意見	公園の魅力をどう生み出していくかという部分で、公園そのものから収益性は低いと思うが、その周辺に企業が立地して、その企業が潤うことで、公園の魅力に反映されないかと思う。
回　　答	純粋に研究機関だけでは、研究施設の中だけで留まってしまうが、研究機関がもっと外に出てその効果が得られるようにすれば良いと思う。医療関係の施設は収益性が高いが、それ以外のものは研修や、宿泊、会議、訪れた人達が食べたり飲んだりすることが収益につながる。純粋に研究所があるだけではなく、それに集まる人等が付加価値をよんでそこに収益が発生する。海洋博記念公園や、首里城公園でも物品販売等が大きな収益を生んでいる。
質問・意見	企業や研究施設を誘致するに当たって、環境整備（インフラ整備等）をするだけで十分なのか。
回　　答	国際文化公園都市ではなぜ企業立地が成り立っているのかというと、外的な要因としてはアクセスの良さがある。また、モノレールが通ったことも大きい。これができたことによって人口集積が進んだ。人口集積が進んで次に出てくるものとしては商業施設があるが、ここではそうではなかった。国際文化公園都市ではもともとその土地に根付いていた製薬企業や医療関係の企業が進出している。そういった企業の、研究所のような少し大きめの施設が欲しい、新しい

機能を拡張した施設を建てたいといったニーズと、大阪に近く土地の値段が安いということがうまく重なって成功したと考えられる。土地の安さだけでは魅力にはなりえないと思う。より強い魅力があれば企業は進出してくると思う。国際文化公園都市は郊外なので土地の値段が安く、通常であれば都心へ出るにも不便で時間がかかるが、新たな交通手段が整備されたことによってその欠点が解決されたことが成功要因となっている。普天間の場合は都市型であり、アクセスはそれなりに良いが、鉄軌道が整備されることでもっと交通が強化される。

質問・意見 宜野湾市に何かあるかと聞かれても答えきれない部分がある。人を呼び寄せるものがあるかというと現状ではないと思う。価値を見出すための普天間公園と考えた方が良いのか。

回　　答 もともと宜野湾市で検討してきた研究学園都市構想というものがある。宜野湾市には琉球大学や沖縄国際大学など、大学が結構揃っている。大学では国際的な会議や学会も重要だが、コンベンションセンター小会議室等がないので、使いにくいという現状がある。そのため、大学関係の研究所や集会所、研修所のニーズはあると思う。大学の活用が普天間の一つの要素として挙げられる。今後、産官学で様々な共同研究等がますます増え、そこから新しい企業が生まれる、そういうものを支援する仕組みがあれば、テクノパークにも良い影響があると思う。大学は大学だけでなく、企業と一緒になり、そこから新しい企業が出てくるということが一つの方向性となると思う。

質問・意見 大学院大学は成功していくのか。

回　　答 大学院大学は学生・教員の約半分は外国人ということで、まだ定員人数には達していないが、すでに開校している。予定通り開校はしているが、彼らのフィールドがないことが問題となっている。大学の中には実験室が少なく、生化学等では実験等に用いる資源が海洋生物や植物等であるため、近くに資源が豊富な研究施設等を求めている。もし海の近く等に実験施設等を作ることができれば一緒に共同研究することもできると思う。植物工場もどんどん進んでおり、普天間公園という環境の中で、植物工場として新しい農業の形を展開していくことで、バイオ技術との連携も図ることができると思う。新技術を合せたものは成り立つと思うが、それが県内企業から出てくれば一番良いと思う。海外の企業とは協力関係でやっていければ良いのではないか。

質問・意見 自社でリゾート施設を持ちながら近くに研究所等を建てている企業も事例としてあるので、就業環境としてリゾート的な要素も必要だと思う。

質問・意見 研究施設は海洋資源等の資源が豊富な場所に立地することが良いような気はする。研究施設をもってくるために今のうちに広い土地を使って整備し、誘致に

つなげていくという考え方なのか。

回　　答　面積についてだが、普天間の跡地は約 500ha で大規模公園が少なくとも 100ha で、100ha は国営公園、それ以外は県や市の公園と絡めて整備を行う。公園の中には企業が立地する所があったり、組合せだと思う。企業が公園の中でうまく生きるようなものと、公園と絡めて近隣の用地がより生きるようなものがあると思う。しかし、純粋な公園もそれはそれで必要である。
普天間では多くの企業が立地できるほど面積的な余裕はない。あまり多くの企業を誘致すると公園がなくなってしまう。本来は公園。公園の中に企業立地ができるような仕組みがあれば非常にユニークな公園ができ、産業振興や収益拡大につながると思う。そこにどういった企業を優先的に入れたら良いのかということを考えるべきである。企業同士が競いあって色々なアイデアがでれば良いと思う。たくさんのものを誘致しようとするのとは違う。希少価値をアピールした方が良い。場合によっては外国の企業にもプロポーザル等の方法で入ってもらっても良いと思う。